

保育者志望短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究

—UPI(学生精神健康調査)と自尊感情との関連 及びUPIの継時的分析を通して—

橋本 翼 垂見 直樹

A Study of Mental Health Condition of Junior College Students
who Want to Become Nursery School and Kindergarten Teachers

—Based on the Results of a Questionnaire Survey of the
Relation Between UPI and Self Esteem, and Analysis of the
Difference among Results of Regular Surveys of UPI—

Tsubasa Hashimoto Naoki Tarumi

Abstract

The purpose of this study is to investigate the mental health condition of junior college students in the Nursery School and Kindergarten Teacher course by doing a questionnaire survey. This survey named by the third time(Time 3), and the result was compared with the past results of UPI tested every six months from April, 2014. A questionnaire consisting of UPI short version, Self Esteem Scale and a question about personal concerns was given to students.

At the Time 3, 140 students participated the survey and 131 students' results were analyzed. The results were as follows: ①, the first grade students got significantly lower scores of UPI short version in comparison with second year students, conversely they got significantly higher scores of Self Esteem Scale. ②, students who showed increasingly high scores of UPI short version correlated with getting lower scores of Self Esteem Scale. ③, about half of all students had concerns about and expressed the need for support by college faculty and staff.

In doing this survey we found that the results of comparing past scores of UPI

short version with scores at Time3 were not significant. In addition, we found that students who got high scores of UPI short version at the time of entering junior college should be supported by college faculty and staff for two years.

As a result of this study, the authors suggest that a support system of all students who need help should be put in place as soon as possible. Also, students' condition of mental health should continue to be evaluated in order to determine the need for such support by our college faculty and staff.

Key words: mental health condition of junior college students in the Nursery School and Kindergarten Teacher, UPI , Self Esteem

問題の所在

橋本・垂見(2014)は、保育者志望短期大学生のメンタルヘルスの状態と学生の悩みの質に関して質問紙形式の調査を行った。その結果、多くの保育者志望学生のメンタルヘルスが悪化した状態にあることが示された。また、学生の悩みの質的分析からは、学生が保育職という専門的職業に就くことへの不安や迷い、多忙な短大生活や固定化した人間関係に心身ともに疲れ果てている状態像が明らかになった。そして今後の課題として、学生一人一人のニーズに応じたきめ細やかな学生支援体制を確立することの必要性が喫緊の課題であると提言されている。

本研究では、前回の調査結果(橋本・垂見,2014)をふまえ、保育者志望短期大学生のメンタルヘルスの悪化の背景として、いかなる要因が関与しているのかを探索的に研究することを目的とする。結果として、教員が学生に対し、「いつ」「誰が」「どのような」サポートを提供していくことが有効であり、かつ学生のメンタルヘルスの向上に寄与できるかという点について若干の考察を試みたい。

著者らが保育者志望短期大学生の若者たちと日々接していて感じることは、彼らが多忙な短期大学での学校生活の中で、心身ともに疲弊していることである。新カリキュラムの履修による授業数の増加、レポートなど課題の多さ、保育技術の習得に関する授業外の練習など、ひと時も休まる暇がない。加えて本学の学生は、アルバイトをせざるを得ない事情を抱えている者も多く、放課後も自分の時間がない学生が多数在籍している。こうした事情から、学生のメンタルヘルスの状態が悪化しており、加えて学業不振による単位未取得などが続くと、保育者としての適性に自ら迷いを感じ、中退を選択する者も出てくるのではないだろうか。

そして、別の観点から著者らが学生の特徴として感じることは、彼らの自尊感情(self esteem)が著しく低下している点である。自分に自信がなく、ほめられた経験に乏しい学生が多い印象を受ける。自尊感情の低下は意欲の低下につながり、多忙な短大生活を送る中でより心身の疲弊につながる悪循環に陥ることも想定される。

自尊感情とは、山本ら(2001)によれば、「人が自分自身についてどのように感じるのか」という感じ方のことであり、自己の価値についての評価的な感情や感覚」と定義される。

自尊感情を測る尺度の中でも信頼性,妥当性共に確認されている尺度として,ローゼンバーグ(1965)の開発した自尊感情尺度がある。山本ら(2001)によれば,ローゼンバーグの自尊感情の捉え方は,他者との比較ではなく自分自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを持っている。ローゼンバーグの自尊心尺度を用いて青年期の自尊感情を測定する研究は数多く行われているが,短期大学生の自尊感情とメンタルヘルスとの関連を測定した研究は少ない。森山ら(2012)は短期大学生のメンタルヘルスの変化を縦断的に調査している。抑うつと自尊感情を測る尺度を同一被験者に3ヶ月間隔で計7回実施し,分析している。その結果,抑うつと自尊感情の得点差に有意差は見られなかったが,自尊感情得点において,1年次と2年次で異なる可能性が示唆されている。藏本・佐藤(2013)は,大学生を対象に,大学精神健康調査UPI(University Personality Inventory):以下UPIと表記)と自尊感情との関連を調査している。その結果,自尊感情とUPI得点の間には,負の相関($r = .45, p < .01$)が見られた。つまり,UPIの得点が低いほど自尊感情得点が高くなる傾向が見られた。ローゼンバーグの自尊感情尺度を用いて自尊感情と精神的健康を測定した他の研究としては,水谷・雨宮(2015)の研究がある。著者らは,大学生を対象に,小学校,中学校,高校のいじめ被害経験を回顧法によって尋ね,いじめ被害経験とWell-Beingおよび自尊感情との関連を調査した。その結果,いじめ被害経験は高等学校より小中のほうが多く,いじめ被害経験が大学生のWell-Beingに直接的にも,自尊感情を介して間接的にも影響を与えていていることが明らかとなった。中間(2013)は「自己をとりまく他者や関係に対する肯定的感情」を「恩恵享受的自己感」と定義し,自尊感情と心理的健康との関連を調査した。その結果,自尊感情が高くなない場合でも恩恵享受的自己感を持つことで心理的健康が維持される可能性があることが示唆されている。

以上のことから,自尊感情は精神的健康に密接な影響を与えており,自尊感情が高くなるほど精神的健康が保たれている可能性が先行研究からは示唆される。ただし,保育系短期大学生の精神的健康に関して,自尊感情との関連から調査した研究は見られていない。また,UPIを用いた研究においても,そのほとんどが大学生を対象にしたものであり,保育系短期大学生に対してUPIを継続的に実施し,その変化を調べた研究は見当たらない。本学保育科では1年入学時にUPI短縮版を実施しており,2015年度からは4月時と9月時の1年に2回学生にUPI短縮版を実施し,学生のメンタルヘルスの状態を把握し支援につなげる手段として利用している。そこで本研究では,保育者志望学生のメンタルヘルスの状態をUPI短縮版により把握し,自尊感情得点との関連を調べ,過去のUPI短縮版得点のデータとの比較を試みることとする。

本研究の目的

本研究の目的は以下の三点である。

- 1) 保育者志望学生のメンタルヘルスの状態をUPI短縮版得点から把握し,自尊感情との関連を調べること。

- 2) 1年生と2年生のメンタルヘルスの状態と自尊感情の高さを比較すること。
- 3) UPI 短縮版得点の継時的变化について調査することで,学年や時期によって,学生のメンタルヘルスの状態に変化が見られるかという点を検討すること。

方法

1. 調査の概要

・調査対象

近畿大学九州短期大学保育科 1年生および2年生

・調査時期

平成 27 年 9 月下旬に実施。著者のうち一名が担当している、「教育心理学」および「障害児保育」の授業中に質問紙を配布し,紙面および口頭で調査協力依頼を行い,同意が得られた学生にその場で回答を求め,回収した。

・調査内容

質問紙は以下の内容で構成されている。((2) のみ巻末に資料として掲載。)

(1). UPI(University Personality Inventory:大学精神健康調査)の短縮版

UPI は大学生の精神的健康を調査する目的で開発され,様々な大学で用いられている。学生の精神的健康度を把握するため,主に 4 月の入学時に UPI を測定する短大が多い。本短大においても UPI の中から 30 項目を選んだ短縮版を 4 月の入学時に実施しており,保育科学生に対しては平成 26 年度の調査(橋本・垂見,2014)以降半年に一回実施を続けているものである。今回の調査を第 3 期(Time3)の調査と命名し,後述する第 1,2 期の調査結果と比較する。UPI における回答の内容は,「精神身体的訴え」(「不眠がちである」など),「抑うつ傾向」(「悲観的になる」など),「対人不安」(ものごとに自信が持てない)など),「強迫傾向・被害関係念慮」(「他人の視線が気になる」など)の 4 つに分類される。本研究では,「最近半年間に」各項目を経験したことがあるかを質問し,回答を求めた。各質問に「はい」「いいえ」いずれかの回答を求め,「はい」に 1 点,「いいえ」は 0 点を単純加算する。得点範囲は 0~30 点である。

(2). 自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)

Rosenberg(1965)により作成された自尊感情を測定する尺度の邦訳版。10 項目から構成されており,尺度の信頼性,妥当性ともに高い。自尊感情に関する尺度は本尺度以降多数開発されているが,今回は本学学生のメンタルヘルスと自尊感情との関連を探索的に調査することが目的であるため,信頼性および妥当性の高い本尺度を選択した。

「少なくとも人並みには価値のある人間である」,「自分には自慢できるところがあまりない」(逆転項目)などの項目から構成されている。採点は各項目 5 点満点であり,逆転項目は 5 点→1 点,4 点→2 点,2 点→4 点,1 点→5 点,に変換して単純加算する。得点範囲は 10 点~50 点である。

(3). 悩みの有無と相談希望に関する質問項目

本調査は学生のメンタルヘルスに関する調査であるため,倫理的配慮として悩みの有無と相談の希望を質問し,早期に学生を支援する機会を保証する必要がある。まず現時点で悩みがあるかどうかを尋ね,悩みが「ある」と回答した学生には更にその悩みを「相談したい」,「今はまだ相談しなくてよい」,「相談したくない」のいずれかに回答するように求めた。「相談したい」と回答した学生に対しては,臨床心理士の資格を有する主著者が後日個別に面談を実施し,学生の個別支援に努めた。

2. 過去のメンタルヘルス調査の実施時期および内容

(1) 第1期(Time1)の調査

平成26年度保育科入学生に対して1年次10月時に実施したメンタルヘルスに関する調査結果(橋本・垂見,2014)のうち,UPI短縮版の得点結果および悩みの有無と相談希望に関する項目を分析対象とした。

(2). 第2期(Time2)の調査

平成27年度4月時に入学生(1年生)および2年生に対して実施したメンタルヘルスに関する調査。UPI短縮版および悩みの有無と相談希望から構成されており,上記項目を分析対象とした。

結果

結果の分析には,IBM SPSS Statistics(Version23)を使用した。

1. 第3期(Time3)のメンタルヘルス調査の分析

・回答者数および回収率

回答者数は,1年生72名,2年生60名,計132名であった。不備のあったデータを分析から除外し,最終的な分析対象は1年生71名,2年生60名,計131名となった。回収率は平成27年度9月末時点の在籍学生数(140名)の93.57%であった。

・各学年におけるUPI短縮版得点および自尊感情得点の度数分布

*Figure1～Figure4*は各学年のUPI短縮版得点および自尊感情得点の度数分布表を示したものである。以下詳しく各図について記述する。

*Figure1*に示しているように,1年生のUPI短縮版の平均値(SD)は7.93(5.93)であった。得点範囲は0～25点であった。得点の分布を見ると,15点以上を示している人数はのべ11名(15.49%)であった。また,20点以上を示している人数は2名(2.81%)であった。

一方*Figure2*に示しているように,2年生のUPI短縮版の平均値(SD)は10.30(6.25)であった。得点範囲は0～27点であった。得点の分布を見ると,15点以上を示している人数は

14名(23. 33%)であった。また,20点以上を示している人数は5名(8. 33%)であった。

Figure3に示しているように,1年生の自尊感情得点の平均値(SD)は31. 34(5.83)であった。得点範囲は16点～43点であった。得点の分布に着目すると,10～25点が9名(12. 67%),26～29が12名(16. 90%),30～35点が36名(50. 70%),36～45点が14名(19. 71%)であった。

Figure4に示しているように,2年生の自尊感情得点の平均値(SD)は29. 05(5.57)であった。得点範囲は11～38点であった。得点の分布に着目すると,10～25点が12名(20. 0%),26～29点が16名(26. 66%),30～35点が28名(46. 66%),36～40点が4名(6. 66%)であった。

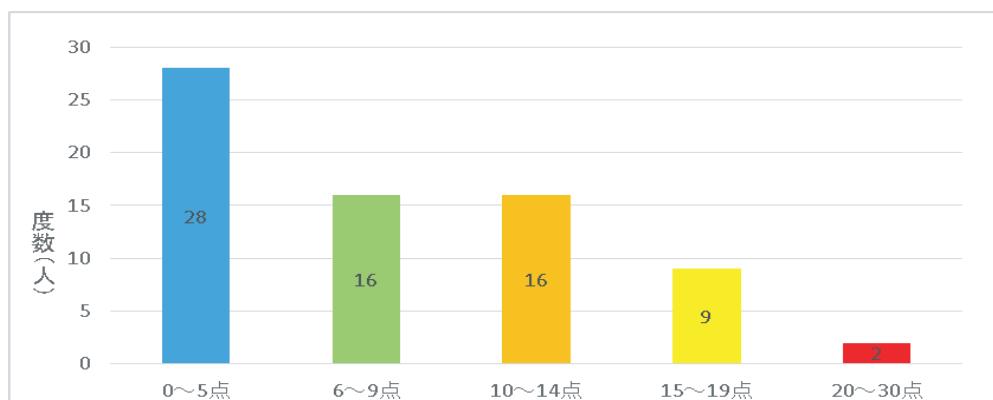
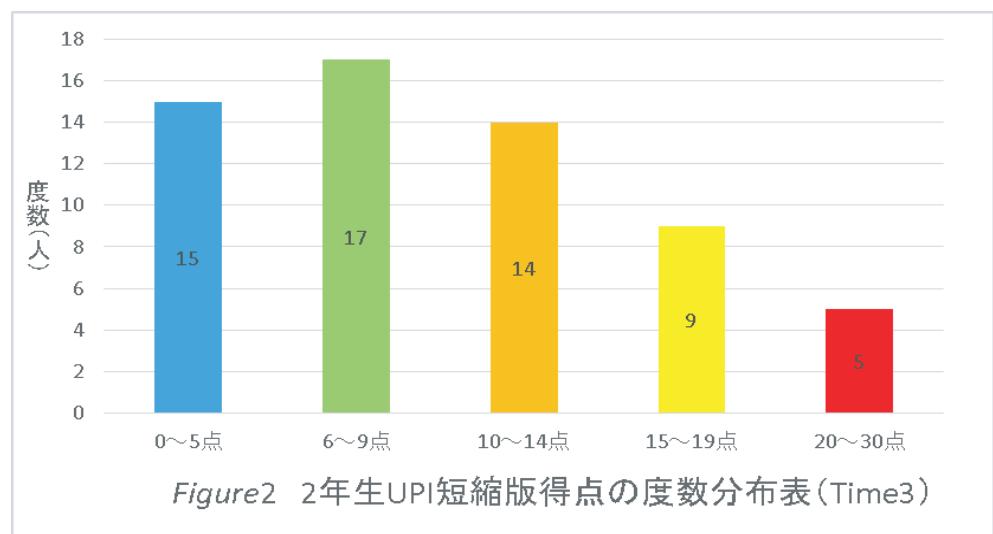
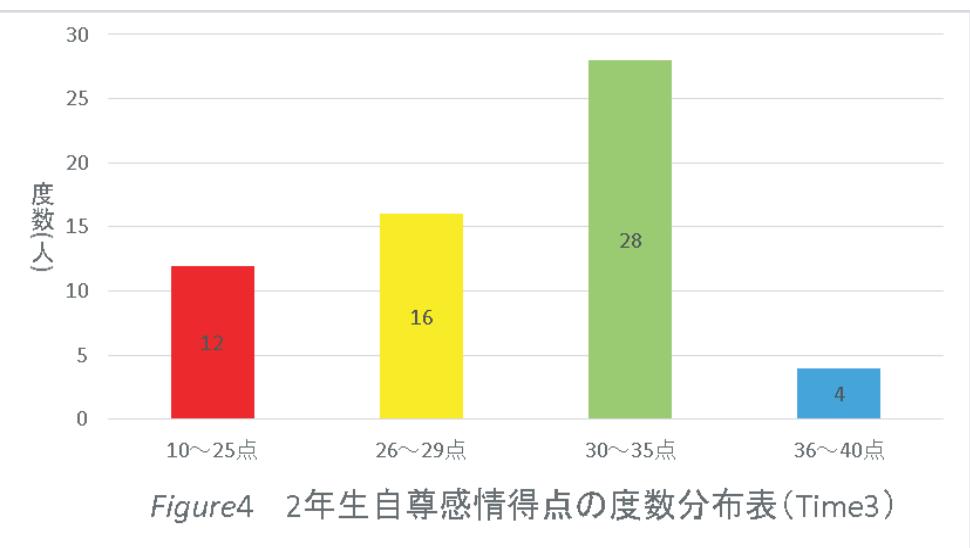
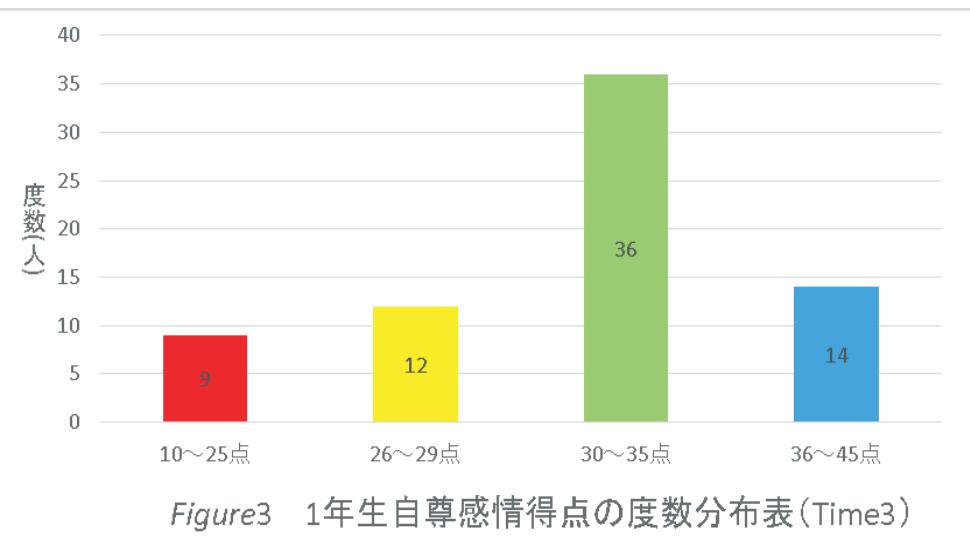


Figure1 1年生UPI短縮版得点の度数分布表(Time3)





・各学年のUPI短縮版得点と自尊感情得点の比較

Table1に、各学年のUPI短縮版得点と自尊感情得点の記述統計量と相関を示す。

学年ごとに、UPI短縮版得点と自尊感情得点の間でピアソンの積率相関係数を求めたところ、1年生($r = -.48$)、2年生($r = -.43$)共に有意な負の相関が認められた。したがって、自尊心得点が高い学生ほどUPI短縮版得点が低くなる傾向になることが示された。

次に1年生と2年生のUPI短縮版得点を比較した結果、有意な差が認められた。

($t(129) = 2.22, p < .05$)。したがって、1年生は2年生に比べてUPI短縮版得点が低い傾向

にあることが示された。

また,1年生と2年生の自尊感情得点を比較した結果,有意な差が認められた。
($t(129)=2.28, p<.05$)。従って,1年生は2年生に比べて自尊感情得点が高い傾向にあることが示された。

学年ごとのUPI短縮版得点を中央値で2分割し,UPI短縮版得点低群およびUPI短縮版得点高群と名付けた。Table2に各学年のUPI短縮版高低群における自尊感情得点の記述統計量を示す。

学年ごとのUPI短縮版得点の高低と自尊感情得点の比較を行った。その結果,1年生($t(68)=3.66, p<.01$),2年生。($t(58)=2.66, p<.05$)共に有意な差が認められた。

したがって,各学年UPI得点が高いほど自尊感情が低くなる傾向が示された。

Table1 各学年のUPI短縮版得点及び自尊感情得点の記述統計量と相関(Time3)

学年	UPI 得点			自尊感情得点		
	度数(n)	平均値(M)	標準偏差(SD)	平均値(M)	標準偏差(SD)	相関係数
1年	71	7.93	5.93	31.34	5.83	-0.486**
2年	60	10.3	6.25	29.05	5.57	-0.431**
<i>t</i> 値		-2.22*		2.28*		

**. $p<.01$ *. $p<.05$

Table2 各学年のUPI短縮版得点高低群における自尊感情得点の記述統計量(Time3)

学年	UPI 低群			UPI 高群			
	度数(n)	平均値(M)	標準偏差(SD)	度数(n)	平均値(M)	標準偏差(SD)	<i>t</i> 値
1年	38	33.60	4.52	32	28.93	5.83	3.66**
2年	32	30.75	4.83	28	27.10	5.80	2.65*

**. $p<.01$ *. $p<.05$

2. UPI短縮版得点の継時的变化に関する分析

・1年生のUPI短縮版得点のTime2とTime3の比較

UPI短縮版得点の継時的变化を調べるため,1年生の4月時(Time2)に実施したUPI短縮版得点と9月時(Time3)に実施したUPI短縮版得点の比較を行った。分析対象はTime2とTime3の両方に回答している学生のUPI短縮版得点のデータを選択した。対象人数は71名であった。その結果,有意な差は認められなかった($t(70)=1.37, n.s.$)。

・2年生のUPI短縮版得点のTime1,Time2,Time3間の比較

2年生のUPI短縮版得点の継時的变化を調べるため,1年時10月(Time1),2年時4月

(Time2),2 年次 9 月(Time3)に実施した UPI 短縮版得点の比較を行った。分析対象は Time1,Time2,Time3 全てに回答している学生の UPI 短縮版得点のデータを選択した。対象人数は 51 名であった。実施時期を独立変数,UPI 短縮版得点を従属変数とした一要因 3 水準の分散分析を行った結果,有意な主効果は認められなかった($F(2,100)=.16$, n.s.)。したがって,時期による UPI 短縮版得点の変化は認められないことが示された。

3. Time3 における配慮項目と学生の悩みの有無に関する分析

Time3 の UPI 短縮版の項目のうち,Key 項目の一つである質問 10 「死にたくなることがある」に「はい」と回答した学生の数は,1 年生 4 名(5.63%),2 年生 6 名(10%)であった。

また,悩みの有無を尋ねた質問では,現在悩みが「ある」と回答した学生は,1 年生が 22 名(30.98%),2 年生が 34 名(56.66%)であった。悩みが「ある」と回答した学生の中で,悩みを調査者に「相談したい」と回答した人数は 1 年生 4 名(18.2%),2 年生 2 名(5.9%)であった。

「今はまだ相談しなくてもよい」と回答した学生は,1 年生 10 名(45.5%),2 年生 23 名(67.6%)であった。「相談したくない」と回答した学生は,1 年生 8 名(36.4%),2 年生 9 名(26.5%)であった。

考察

1) 第 3 期(Time3)のメンタルヘルス調査の分析結果より

第 3 期の各学年の UPI 短縮版得点と自尊感情得点を比較した結果,1 年生よりも 2 年生の方が UPI 短縮版得点が高く,自尊感情得点が低いことが示された。すなわち 2 年生の方が 1 年生に比べ,メンタルヘルスの状態が悪く自尊感情も低いと言える。また先行研究同様 UPI 短縮版得点と自尊感情得点の間には有意な負の相関が見られた。すなわち自尊感情が高い学生ほどメンタルヘルスの状態が良好であることが示唆された。2 年生は昨年の調査においても UPI 短縮版得点の数値が高く,サポートが必要な学生が多いことが分かっているが,1 年後のメンタルヘルスの状態も依然として顕著な改善は見られていない。自尊感情の低さも 1 年生に比べると顕著であり,2 年生に関しては,今後短期大学を卒業するまでの半年間に自尊感情を高めるような体験を積み重ねていくことがメンタルヘルスの改善のためにも必要であることが結果から示唆されている。

一方 1 年生に関しては比較的安定した自尊感情とメンタルヘルスの状態を維持していると考えられる。この点は,10 月時時点での退学者数が,1 年生は 2 年生よりも少ないという結果にも影響を与えている可能性がある。

2) UPI 短縮版得点の継時的变化に関する分析結果より

UPI 短縮版得点の継時的变化を分析した結果,両学年共に時期による得点の変化は認められなかった。このことは,UPI 短縮版得点で測定される学生のメンタルヘルスの状態がある

程度一定の特性的な側面を有していることを示唆している。すなわち,入学時のUPI 短縮版得点でハイリスクな得点を有している学生たちに関しては,入学後一貫してメンタルヘルスの状態が改善せぬまま多忙な短期大学生活を送るリスクが高い。そのため,ハイリスク学生には2年間を通じてサポートを提供することが必要であると考えられる。

また,今回UPI 短縮版得点の時期による変化が見られなかった背景として,UPI 短縮版が2件法であり,得点の範囲が0~30点であるため,平均点の差が得られにくかった点が考えられる。例えば酒井(2015)は,UPI の5件法版であるUPI - GRを作成し,信頼性および妥当性を検証している。その結果,2項目を除いた58項目が5件法化に適していることが示され,2件法よりも幅広い精神的健康度の測定に適している可能性が示唆されている。今後5件法のUPI を調査の中で用いることで,より細かな学生の悩みの把握が可能になるかもしれない。またUPI 短縮版の項目妥当性に関しても,今後の検証が必要である。

3) 第3期(Time3)におけるUPI 短縮版の配慮項目と学生の悩みの分析結果より

第3期の各学年のUPI 短縮版において,項目10(死にたくなることがある)の回答者数は全員で10名であり,全回答者数の7.63%であった。昨年の調査(橋本・垂見,2014)でも指摘した点であるが,項目10はKey項目と言われる項目の一つであり,学生支援の観点から呼び出し面接の対象とする大学も少なくない。本学においても,今後項目10に回答した学生を呼び出してアセスメント面接を行うなどの活用を検討していくことが望ましい。

また,悩みの有無の質問に関しては,全学年で56名(42%)の学生が悩みが「ある」と回答しており,相談希望に関しても「相談したい」「今はまだ相談しなくてもよい」と回答した学生が39名(29.77%)いるという結果になった。つまりおよそ全学生の3分の1の学生が,機会があれば教員に悩みを相談したいと考えているということになる。本学はアドバイザーリング制度を採用し,学生一人一人に決め細やかなサポートを行う体制が出来ている。アドバイザーが学生から相談に訪れるのを待つのではなく,積極的に学生と信頼関係を形成すべく,定期的にアドバイザーによる学生面談を実施するなどの機会を増やしていくことで,タイミングを逃すことなく,適切な時期に学生のニーズに即した支援を教員側が行っていくことが可能になるのではないだろうか。

今後の課題

第3期(Time3)の調査では,学生の自尊感情を測定し,UPI 短縮版得点との関連を調べた。その結果,2年生は1年生に比べ自尊感情が有意に低いことが明らかになったものの,その値は先行研究の調査と比べても極端に低い訳ではない。つまり本学保育科の学生の自尊感情は低いとは結論付けられなかったことになる。近藤(2010,2013)は自尊感情を「社会的自尊感情(Social Self Esteem:SOSE)」と「基本的自尊感情(Basic Self Esteem:BASE)」に分類し,その組み合わせから自尊感情の4つのタイプを見出している。「基本的自尊感情」はある程度一貫した特性的側面を有しており,「あるがままの自分を受け入れ,自分を丸ごとその

ままに認める感情」(近藤,2013)である。「社会的自尊感情」は自尊感情の一部であり、「他者との比較や優劣で決まってくる...」(中略)いわば条件付きで相対的な感情」(近藤,2010)であるとされる。本学の学生の自尊感情の状態ははどの領域に属しているのかを,上記の二種の自尊感情の分類を用いて明らかにしていくことも,今後の学生支援体制の充実に寄与すると思われるため,今後の検討課題としたい。

その他の課題としては,UPI のような自己報告式の調査では「問題なし」と結論付けられてしまう学生の支援に寄与しうる,アセスメントツールの検討と導入が挙げられる。例えば発達障がい傾向のある学生の「困り感」を早期に把握することも学生支援の重要な役割であるが,発達障がいの傾向のある学生の精神的健康度をUPI 短縮版の得点から把握することは極めて難しい印象を著者は感じている。また例えば,対人不信感が強く自己開示することを拒む学生はUPI 短縮版の質問項目に関するすべて「いいえ」で回答し,結果 0 点で「精神的に健康である」と結論付けられることも十分ありうる。今後の研究では学生の多様な状態像をできるかぎり的確に把握し,早期に学生の心理的支援を行うことが可能な方法を模索していく。そして本学における有効な学生支援体制の構築に寄与していきたいと考える。

学生支援体制の組織化に向けた本学的課題

上記の研究結果から,学生支援体制を具体的に組織化する必要性の高さが確認されたといえる。

本学保育科学生のメンタルヘルス状況の把握と分析は緒に就いたばかりであるが,昨年からの分析を通していくつかのことがわかつってきた。自尊感情とメンタルヘルスの負の相関は,学生の自尊感情を高める教育的関わりの必要性を提起する。それは,メンタルヘルスが極端に悪化した学生に対する専門的な相談業務という狭義の学生支援だけでなく,すべての学生に対し,授業をはじめとするあらゆる教育場面においてそのような関わりを教員が行う必要性を示唆している。

また,2 年生のUPI 得点が時系列的にみると有意に変化していないことは,少なくとも現状では,本学は学生のメンタルヘルスを改善する機能を有していないことを示している。ここに,支援体制の充実の必要性を改めて確認することができる。

そして,全学生の 3 割が相談のニーズを抱えているという現状も重要である。現在の本学科の学生の「学生相談室」の利用状況からみれば,「潜在的な相談ニーズ」の高さにもかかわらず,学生相談室を利用する学生の割合は低い水準に留まっている。学生相談室の利用促進が求められる。

調査結果を踏まえ,本学において検討すべき具体的課題は以下の 3 点である。

- ①自尊感情を高める教育的関わり
 - ②学生のメンタルヘルスを改善する学生支援体制の構築
 - ③学生相談室の利用促進・活用方法の再検討
- ①に関してはこの視点は教職員間の意識の共有や,授業における言葉かけや評価といった

あらゆる側面で重要な観点である。しかしこれは特定の学内組織が担うべき機能ではないため、学生支援体制の組織化という議論からはひとまず除いておきたい。したがって、主に上記②、③の課題を踏まえ、具体的提言を試論的に行う。

②・③に関しては、相対的に緊急性が高いと思われる、メンタルヘルスが極端に悪化している学生、あるいは発達障がい傾向のある学生への専門的関わりを早期に実施することが挙げられる。これは、中途退学の防止や学生のキャリア教育・就職支援という観点から重要である。学生相談室や医療機関の受診を勧めるなど、学生の状況を入学後早期に把握し、積極的に学生にアプローチするための仕組みが必要がある。また、緊急性が相対的に低い学生に対しても、メンタルヘルスの悪化を防ぐために、学生から見えやすい相談窓口を設置し、配慮の必要な学生に関しては積極的に呼び出し面接をするなどの働きかけが有効なのではないかと思われる。

上記を踏まえ、入学後早期に学生のメンタルヘルスの状況を把握し、要配慮学生を抽出するための各種検査等の計画・実施・分析を担う学内組織が必要である。さらに、分析結果を各教員に伝達し、要配慮学生に関しては各アドバイザーに呼び出し面接等を依頼することで、アドバイザー機能の強化が期待できる。

また、現状では学生相談室の利用率は低い水準に留まっている。背景には、現状週1回水曜午後のみ開室しており、時間的な制限があることなどが想定される。したがって、学内に「学生支援部（仮）」を立ち上げ、複数の教職員が常駐し、学生がいつでもアクセスできる体制を整えることで、学生にとってのアクセシビリティを高める必要がある。常駐する教職員が学生相談室への橋渡しや、医療機関の受診を勧告することなどを行うことで、学生相談室の利用促進や医療機関への接続を行う。こうした業務には学生相談の専門性が要求されるため、学生支援部にはカウンセリングに関する専門性を有する教員が所属することが望ましい。また、学生や保護者からみえやすい窓口にすることで、学生の潜在的な相談ニーズを積極的に拾い上げ、メンタルヘルスの悪化を「先手をうって」予防することを目指す必要がある。そのために、入学時ガイダンス等において組織の存在と役割を周知することが有効であろう。

学生からの相談を待つのではなく、予防的・積極的に学校側から働きかけることが重要である。したがって、入学後早期に、学生のメンタルヘルス、学業への動機づけの高さ、パーソナリティ、職業適性などについて多面的に学生の姿を把握する必要がある。神谷（2010）では、保育科学生に対して実施した調査で、保育者効力感と入学時の動機づけとの関連を指摘している。人から勧められた、などの他律的な動機づけではなく、自分で選択するという自律的な動機づけをもっている学生が、実習経験を通して保育という職業へのやりがいを見出すことができると指摘している。

以上をまとめれば、学内組織は学生の状況を分析する機能、積極的に学生に呼び出し面接などのアプローチをする権限を含めた相談機能、学内教職員への情報発信機能をあわせもつ組織として構想することが求められる。これらは、保育科学生への調査結果を踏まえた提言であるが、本学に在学するすべての学生への支援を視野に入れた組織づくりが必要である。

生活福祉情報科については、特に進路・就職への動機づけにおいて保育科の学生とは異なる現状が予想される。また、メンタルヘルスの状況が悪化している学生は、潜在的に多く存在することが予想される。両学科学生の特徴を把握し、すべての学生に対し共通に必要な支援と、学科の特性を踏まえた個別の支援の方法について議論する必要がある。

文献

- 橋本翼・垂見直樹（2014）保育者志望学生のメンタルヘルスと支援方策の検討—近畿大学九州短期大学保育科1年生の調査から— 近畿大学九州短期大学研究紀要,44,47–61
- 堀洋道監修 山本眞理子編（2001）自尊感情尺度 心理測定尺度集I 29–31 サイエンス社
- 神谷哲司 2010 保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的変化 保育学研究,48(2),86–95
- 藏本信比古・佐藤浩樹（2013）大学生におけるSOC(首尾一貫感覚)とUPI 北海道情報大学紀要,24(2),55-58
- 近藤卓（2010）自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践— 金子書房
- 近藤卓（2013）子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット(SOBA - SET)で自尊感情を測る ほんの森出版
- 水谷聰秀・雨宮俊彦（2015）小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響 教育心理学研究,63,102–110
- 森山雅子・杉山英晴・谷伊織・五十嵐素子 2012 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究(20)—抑うつおよび自尊感情の2年間の変化— 日本教育心理学会総会発表論文集,54,278
- 中間玲子 2013 自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵享受自己感」の概念提起— 教育心理学研究, 61, 374-376

〈付記〉

本研究にご協力いただいた保育科学生の皆様に心より感謝します。

【資料】 (2) 自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)

下に書いてある文章をよく読んであてはまる数字に○をつけてください。
次の特徴のそれぞれについて,あなた自身にどの程度あてはまるかを答えて
ください。他からどう見られているかではなく,あなたが,あなた自身をどのように思っているかを,ありのままに答えてください。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない
1. 少なくとも人並みには, 値値 (かち) のある人間である。	5	4	3	2	1
2. 色々な良い素質 (そしつ) をもっている。	5	4	3	2	1
3. 敗北者 (はいぼくしゃ) だと思うことがよくある。	5	4	3	2	1
4. 物事を人並みには, うまくやれる。	5	4	3	2	1
5. 自分には, 自慢 (じまん) できるところがあまりない。	5	4	3	2	1
6. 自分に対して肯定的 (こうていてき) である。	5	4	3	2	1
7. だいたいにおいて, 自分に満足している。	5	4	3	2	1
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	5	4	3	2	1
9. 自分はまったくだめな人間だと思うことがある。	5	4	3	2	1
10. なにかにつけて, 自分は役に立たない人間だと思う。	5	4	3	2	1

(注 : 質問 3, 5, 8, 9, 10 は逆転項目)